伝道と翻訳　―受容と変容の〝はざま〟で―（33）

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑯

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

異文化接触としての漢訳

これまで見てきたように、鳩摩羅什と玄奘は自身の仏典解釈と言語能力によって、約千年にわたる訳経史上の一時代を築きあげた。訳出された仏典は中国における仏教受容を促し、それぞれの時代の教理理解に多大な影響を及ぼした。漢訳はインドと中国という異なる文化の接触であった。その過程では、それぞれの言語が内包する固有の思想や概念が融和的に邂逅して教理が移植された場合もあれば、教理が変容や変質を伴って移植されたこともあった。

鳩摩羅什と玄奘の翻訳上の相違は、特に翻訳が困難な場合に顕著にみられた。そのような困難に直面した際の具体的な対処は、類似する概念を適応させる方法、原語の音をそのまま音写する方法、そして全く新しい訳語を開発する方法に集約される。

表音文字によって記された梵語やガンダーラ語の原典にみられる翻訳困難な語句は、まず、類似する概念を適応させることで語義の移植が試みられた。これは既存の概念を訳語として採用する文化適応の翻訳である。例えば、インド神話に登場する蛇（コブラ）の神「ナーガ」(Nāga) は、仏典では仏法を守護する王として登場するが、漢訳ではそれを蛇ではなく中国における神話的存在の「龍」に適応させた。ナーガと龍は本来全く異質なものであるが、それぞれの文化的背景を考慮し、双方に備わる神秘的霊性から、近似する概念としてナーガに龍を適応させた。未知なるナーガそのものを翻訳によって漢人に知らしめることは不可能である。しかし龍という近似の概念によってナーガの可塑的理解は可能となる。

原語の音を漢字で音写して移植する音訳という方法では、原語を理解していないほとんどの読み手が語義を直ちに理解することは不可能であった。訳語が様々な場面で繰り返し用いられることによってはじめて正確なニュアンスがコミュニティに浸透するので、語義の定着には一定の時間を必要とした。さらには語義の曲解のリスクもあった。たとえば、「究極の真理」を意味する Siddhānta は、「達成された」を意味する Siddha と「最後」を意味する anta の複合語である。漢訳ではこの語は音訳され「悉檀」とされた。「壇」は「施し」を意味する別のサンスクリット語 dāna の音写語としても用いられていたので、その影響から「悉檀」は「悉く施しをする」と曲解され、「究極の真理」が「あまねく人々に施すこと」に変容し、語義のすり替えが起きてしまった。つまり、音写語が意味のある文字列として理解され、実際にこのような予期せぬ変容が生じてしまった。

全く新しい仏教語を開発する方法は、それまでの漢語において存在していなかった新たな語彙の創出を意味する。漢人社会ですでに用いられていた漢字同士を組み合わせ、「縁起」や「世界」、「億劫」など、仏教以前には用例として存在していなかった新しい語句が仏教語として創出された。このような場合、個々の漢字から語義がある程度推測できるので、大幅な誤解は避けることができるが、それでも語義の正確な理解には用例の蓄積のために一定の時間が必要となった。どの漢字を組み合わせるのかという点は、まさに翻訳者のセンスが問われた。原語と比較すると、その絶妙な漢訳から翻訳者の原典理解の深みに敬服することが度々ある。ただ訳経僧らが様々な仏教語を創出した結果、多くの混乱が生じた。

これらの具体的方法は、仏典漢訳のみならず翻訳全般にみられる方法である。翻訳は本来、訳される言語に基盤を持つ文化において受容され、吸収されるためのものである。それが翻訳の使命である以上、ただ、原文に忠実で正しいことのみによって評価されるものでもない。翻訳者の視点に立つならば、正確さや忠実さにはグラデーションがあり、あくまでもそれは相対的な問題である。忠実さのみに拘（こだわ）るのであればそもそも翻訳はたちゆかない。達意的な訳文を施した鳩摩羅什と、直訳的で正確さに拘泥した玄奘の翻訳観は対極に位置するが、それぞれが生きた時代の仏教理解の度合いには相違があり、翻訳観の違いは、その時代の要請という観点からも説明できるかもしれない。

さらに翻訳を受容する側の視点からみると、そもそも受容しうるものしか理解しないとも考えられる。翻訳者は受容されるような変容を伴った概念を自らの翻訳によって提示する。その変容とは、あくまでも伝達のための変容であり、変質であってはならない。この受容と変容のはざまで、翻訳者は二言語の言語知のみならず、当該地域の思想や文化を含む世界知を駆使し落としどころを探る。ただ、ある程度の変容は許容されるとしても、致命的な変質に掣肘（せいちゅう）を加えるような何らかの翻訳上の工夫は必要である。語義の移植には、そのような技を可能とする知識と創造力が求められる。

これまで鳩摩羅什と玄奘を中心に訳経史を概観してきたが、真諦や義浄、法顕など多くの著名な訳経僧だけでなく、歴史の闇に埋もれた数多の訳経僧の存在も看過できない。約千年にわたる訳経史では、中国における仏教伝道の献身的努力が積み重ねられた。その歴史の中で主要な仏典は改訳が繰り返された。改訳によって様々な混乱が生じたことは事実だが、先代の訳文をさらに深化させ、それぞれの時代に適った訳文を創出する改訳という積み重ねが、中国に仏教が浸透する過程で必要であった段階的な教理理解を可能にしたとも考えられる。改訳という営みは、中国における共時的な教理伝達の手段としてだけではなく、先代の訳経僧から後代の訳経僧への通時的な教理伝達の手段としても機能していたと考えられる。

唐代にはキリスト教ネストリウス派やゾロアスター教など、仏教以外の宗教も伝来していたが、中国的な変容を経ることがなかったので土着化することなく消滅していった（窪，1979:17）。訳経僧は仏教の教理概念をインド固有の文脈から一旦解き放ち、抽象化し、それを漢字で一般化することで漢訳仏典をうみだした。インドで興った仏教は、漢訳仏典によって漢字で思考し理解される仏教に変容することで中国において受容された。数多くの訳経僧の叡智と信仰心の結晶である漢訳仏典は、仏教土着化の原動力となった。異文化接触としての漢訳の歴史は、蓋し仏教の受容と変容の歴史であったといえよう。

［引用文献］
窪徳忠『中国宗教における受容・変容・行容』山川出版社、1979 年。